

朝鮮王朝成宗代における王室周辺仏事の一側面

—福井・永平寺所蔵 《三帝釈像》を中心に—

李 智英（九州大学大学院）

朝鮮王朝前期の仏画研究では、16 世紀の文定王后(1501－65)が活躍した時期を最盛期とする見方が主流で、当該期の作例を中心に考察されてきた。こうした見方は、16 世紀初めの燕山君による徹底した廃仏以降、明宗代になってようやく文定王后が仏教を復興し、数多くの仏画を発願したという史実に鑑みてのことである。しかし、文定王后による仏事を先取りするかたちで同様の繁栄をみせていた 15 世紀の仏事の意義は、これまで十分に検討されているとはいえない。15 世紀では特に成宗朝において、王室の宗親・女性の庇護の下、願刹の復興や法会の勤修が盛んに行われていたことは数多くの文献史料が示すとおりで、数に乏しいとはいえ、王室周辺で発願された優れた作域をしめす仏画も現存している。15 世紀における王室周辺仏事や仏画制作への理解を深めることは、16 世紀の作例を含めた朝鮮王朝前期仏画全般の性格を知る上で、看過しえない課題である。

本発表では、こうした問題意識に立ち、成宗 14(1483)年に制作された福井・永平寺所蔵の《三帝釈像》をとりあげ、その画記の内容と特異な図像構成について考察を加え、王室周辺で制作された朝鮮王朝前期仏画を包括しうる発願の性格や造形上の特色を考えるための前提条件を確認する。

福井・永平寺所蔵《三帝釈像》は、高臣の盧思慎による画記の内容から、かつて政治の実権を握っていた貞熹王后(1418－83)が病床にあった最晩年、成宗とその妃である貞顕王后、及びその一族の繁栄を願い制作させたことが判明する。永平寺本は、一幅に三体の帝釈天を配するという特異な尊像構成において注目されるが、尊像の配置や女性性を強調する尊容表現にくわえ同時代の文献史料から知られる王室周辺の事情を勘案すると、帝釈天のそれぞれには王室周辺の三人の女性、すなわち、発願者である貞熹王后と成宗の生母・昭恵王后、そして新たに成宗の妃となった貞顕王后という三者の姿が投影されている可能性がきわめて高い。貞熹王后は、坡平尹氏を出自とする世祖の王妃にあたり、世祖亡き後、幼少の孫・成宗に代わって大王大妃として垂簾聴政を行う一方、仏事においては、昭恵王后とともに実質的な中心人物であった。貞顕王后は、貞熹王后と同じく坡平尹氏を出自とし、永平寺本の発願からまもなく貞熹王后が没すると、昭恵王后とともに王室周辺の仏事を担った人物として記憶される。

永平寺本は、死期を目前にした貞熹王后が一族の繁栄・家門の継承に対する切実な願いを特異な尊像構成として実現させた作例であり、当時の王室周辺の仏事を象徴するきわめて高い資料的価値を有している。さらに 16 世紀の王室周辺仏事を復興した文定王后もまた、坡平尹氏を出自とし垂簾聴政を行った人物であったことを念頭に置くと、永平寺本に象徴される貞熹王后の仏事は、16 世紀の王室発願仏画を考える上でも、規範的な意味を有していたと結論づけることができよう。